観光用芸能ショーの人類学的研究
―バリ島バロン・ダンスの仮面に注目して―

吉　田　ゆか子
筑波大学人文社会系　博士特別研究員
（現　国立民族学博物館先端人類科学研究部　機関研究員）

諸　　言

宗教生活に根付く豊かな芸能文化は、インドネシア・バリ州の観光の目玉の一つとなっている。本稿が着目するバロン・ダンスはその代表的演目であり、悪霊払いの儀礼劇チャロナランを観光用にアレンジした舞踊劇である。

バリでは 1970 年代以降、観光産業による「伝統文化」や宗教生活の「汚染」に対する懸念が高まった。そして州は神聖な仮面を儀礼以外の「世俗の」上演に用いることを禁止するなどの対策をとっている。バリの多くの村では、聖獣バロンと魔女ランダの形をした神聖な仮面（御神体）を祀っているが、観光ショーでは、これらではなく、その複製や類似品等、神聖ではない仮面が用いられることが多い。一見、人々が巧みに仮面を使い分け、宗教儀礼と観光の文脈を切り分けているかのようだ。しかしバリでは仮面は潜在的に不可視の存在（神格や悪霊）の住まう場所であり、またバロンやランダといったキャラクター自体が霊的な力と結びつきがちである。本研究では、観光ショー用に生み出された数々の仮面が、バリの人々の芸能実践や宗教生活にいかなる影響を与えているのかを考える。仮面を通して、非人間中心的な視点から、バリの人々にとっての観光化という経験を再考したい。

研究の方法

バロン・ダンスを観光客向けに定期的に上演する（あるいはしていた）12 の劇団を対象に、インタビューや上演および関連する儀礼の観察を行った。尚この 12 劇団は無作為抽出ではない。バロン・ダンスの盛んなバトゥブラン村やその近辺から複数選出したほか、仮面が神性・聖性を纏っている劇団を意図的に探し、対象に含めた。

図 1　バロン

図 2　ランダ

結　　果

（1）仮面の担う役割の多様性とその動態

劇団によって、所有する仮面の位置づけは多様であった。一方の極に、「単なる上演道具」として対象化される仮面があり、もう一方の極に超自然的な力を発揮する神聖な仮面がある。調査の対象となった仮面は皆その二つの極の間のどこかに位置していた。

興味深いのは、仮面が決して固定的な役割を担うのではなく、その軸の間を揺れ動くことである。一般に、御神体用の仮面を作成する場合、様々な特別なプロセスを経る。作業開始は暦上良いとされる日（例えば満月や新月）に行われ、寺院や墓場（setra）などに生える樹木を用いる。さらに、初めの削りだしと完成後には、僧侶や村人が集い儀礼を行い、仮面を浄化しそこに神格を招待する。こうして神格の住処となった仮面は寺院に保管され、毎日供物が捧げられるほか、上演の前後や、特定の日に供物が捧げられる。他方、観光ショー用の仮面を制作する場合、これらの儀礼上の手続きを経ず、また任意の木材を利用する。そうした仮面は基本的には霊的な力を有さない単なる造形品ということになる。

しかしこれらの仮面が霊的な存在となることもある。神聖でないはずの仮面を使って上演した際に、被り手や観客が憑依したり、上演の度に雨が降ったりといった異常な出来事が起きるからだ。その場合、人々は霊媒師や僧侶に解釈を求めたり、憑依した者の言葉に耳を傾ける。そしてこの現象が仮面に不可視の存在が宿った証だと解釈されるケースがある。このような事態が起きる理由として主に以下の三点が言及される。

① 材料となった木材がたまたま霊的な力を持っていた。

② 作業の日取りが偶然良き日であったり優れた仮面職人によって作られたりした。

③ 観光用でも、仮面に対し上演の度に小さな供物や聖水が用いられる。これが積み重なり霊的な力を呼び込んだ。

第 3 点目には若干の補足が必要であろう。バリでは、観光ショーであっても、上演の無事を祈り、舞台や仮面などの上演道具に対して小さな供物を捧げる。またバリでは芸の魅力はタクスーと呼ばれるが、これは神から賜る超自然的な力でもある。タクスーある上演になるようにと、観光ショーであっても（小さいながら）供物が捧げられるのである。

（2）仮面が引き起こす出来事－神聖性を帯びた仮面のその後

観光ショー用の仮面が、後に村の御神体となった事例が存在する。R 劇団は、仮面を購入し定期公演に用いていた。この仮面の周囲に数々の不思議な出来事が起きた事をきっかけに、劇団は、所有するランダ二つが、この村の D 寺院に「祀られる事を望んでいる」のだと知った。村側ははじめこれを渋った。仮面を祀るには、供物の献上や儀礼の実施などのための出費と労働の負担が加わる。また仮面の霊力を信じない者もいた。結局その後約二年間村民の間で議論が重ねられ、やっと寺院で祀ることで合意された。村人の見守るなか、大掛かりな神聖化儀礼をほどこされ、仮面は D 寺院に鎮座する女神様となった。この仮面は、日常的に供物を受け取り、地元の重要な寺院祭で舞う。尚、R 劇団は新たな仮面を購入し、神聖化していないこちらを観光ショーで用いている。

このように村全体を巻き込んだ仮面もあれば、団員の

図 3　御神体の仮面が村を清めて回る儀礼の様子

図 4　観光ショーの光景（Catur Eka Budhi 劇団）

生活を変えてしまう仮面もある。W 劇団の仮面ももともとは観光ショー用に購入されたが、次第に霊的な力を帯びた。この仮面はメンバー A の自宅の隣の小屋に置かれ、A 氏とその妻はその御神体（＝仮面）に仕える僧侶となった。現在は仮面の霊力を聞きつけた人々が、病気が治るように、或いは特定の日時に雨が降らぬようにといった願い事をしに仮面を訪れるようになっている。

（3）神聖化していない仮面の持つ潜在性

僧侶 M は、仮面とは「蜂の巣のようなもの」であると言う。居心地が良ければ、そこに住まうものがでてくる。全ての仮面は、神格の器となる可能性を有しているのである。そのため、観光ショーを上演する劇団の側には、仮面が霊的力と結びつく事を避けるための配慮が見られる。一般に、神格の住処となった神聖な仮面の方が、タクスーのある魅力的な上演ができるといわれるが、神格の入った仮面は多くの供物を要求するようになり、置き場所やとり扱いにも多様な禁忌がつきまとう。また神聖な仮面の観光用の利用を禁止する州の方針もある。そして仮面が本格的に御神体となってしまえば、R 劇団のように新たな仮面を購入せざるをえなくなり、数十万円の出費となる。その為、日々の供物を最低限にしたり、210 日に一度巡って来る Tumpak（楽器や仮面を祀る儀礼）の対象から仮面を除外したりするケースがあった。また仮面をほぼ御神体と見做している W 劇団のケースでも、最終的な入魂儀礼を施していない。これは、観光ショーでの利用を続けるための苦肉の策である。

（4）御神体の働きー仮面同士の見えない同盟

最後に、地元で祀っている御神体の仮面の働きにも言及したい。20 世紀前半から活動を続ける D 劇団と T 劇団は、かつて各地元の御神体（仮面）を使って観光ショーを行っていた。両劇団とも 70 年代に新たに代理の仮面を制作し、以降はこちらを観光ショー用に用いている。しかし現在も、上演前には（舞台には現れない）御神体の仮面に許しを乞い、供物を捧げたり、御神体が作った聖水で舞台を清めたりしている。

おわりに

伝統文化を観光用に加工することで、経済発展と文化（宗教）振興を両立させてきたバリの人々を「したたか」と称し、その巧みさを強調する先行研究もある 1)。しかし本研究から見えてくるは、①観光と儀礼実践の間の入り組んだ関係であり、②その中で仮面を使い分けたり、その霊力のレベルを制御しようとしつつも、仮面に畏怖し、時に翻弄されるバリの人々の姿であり、③儀礼劇の観光化という現象が、劇団主宰者のみならず、仮面、地元の御神体、被り手、観光客、僧侶、霊媒師、地元の村民といった多様なエージェントの働きの中で揺れ動く、葛藤や矛盾を含んだプロセスであるという事である。

謝　　辞

本研究に助成いただいた公益財団法人三島海雲記念財団の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。